

## 一五五六（弘治二）年の豊後教会

溝 部 脩

一五五六年は豊後教会にとって画期的な年であつた。政治にからむこと、教会内部にからむこと、人間の問題、教会の方針の決定といったことがあり、日本の教会の方向づけが徐々に決定されていった年である。

政治的には毛利元就が陶晴賢を討つて、更に山口を攻めた。山口は不安な状態に陥り、当時日本教会の上長であつたトルレス神父は難を逃れて山口より大分に移つた。五六年五月のことであつた。<sup>(1)</sup>こうして豊後は名実共に日本教会の中心となつた。

トルレス神父は一五一〇年頃バレンシアで生れ、三四年司祭叙階、マジョルカ島で文法の教師、その頃から考えることがあり、アメリカ行を決意した。三八年メキシコに渡り、更に四二年ピリアスロボスの艦隊に艦隊付司祭として乗込んだ。不幸な航海で結局はポルトガル人の手に落ち、そこでザビエルと出合つた。四六年のことであり、三六才であつた。四八年イエズス会入会、四九年ザビエルは彼を日本の同伴者として選んだ。来日の折は三十九才であつた。<sup>(2)</sup>「ラテン語によく通じ、教会法を学

び、勤勉で良心の問題に経験をつんだ人物<sup>(3)</sup>」と言われた。実際に教鞭をとつた経験も長く、長官官邸での生活も体験、艦隊での生活、更にザビエルとの生活、世界についての知識の豊富さ等を綜合して判断するとかなりの幅を有した人物であることに気づく。一五五一年の書翰では、日本宣教の初期であるにもかかわらず、仏教諸派に關してかなりの知識を有していることが伺われる。<sup>(4)</sup>ザビエルの片腕であつたし、ザビエルなき後の日本教会の柱であつた。豊後に到着した時には悲しみの連続で疲れきつていて、年より老けてみえたらしく、「善良な老人」と人々から彼は呼ばれていた。彼の善良さ、その禁欲・肥満体であつた彼が聖徳に励み、人々へ細かい配慮をしているその姿についてフロイスはその「日本史」の中で実に生き生きと描いてい

(5) 親しみ易く慈父のようであった。しかし、後に見るように彼は一貫した布教方針を貫いていく強い指導者でもあった。

トルレスは豊後到着後間もなく二名を入会させた。一人は「東方では有名であった」アルメイダであった。ヌーネス神父到着以前、トルレス神父到着後なので五月下旬から六月にかけてのことである。他の一人は、日本青年、二十四才のパウロでありトルレスによって入会した。(6) トルレスは日本人会員を積極的に受入れた。

ヌーネス神父到着十五日前、府内では騒乱があった。「ホージョー殿とタケダ殿という二人の有力な殿の間に争いが起った」と報告されている。小原遠江入道・本庄新左衛門尉・中村新兵衛尉の乱と思われる。(7) ヌーネス一行は到着した。(8) ヌーネスは巡察師であり、日本の上長として日本に留る予定であった。ビレラ神父が彼の同伴者であった。ビレラは十五年日本に滞り、京の宣教を開始した。フロイスはマラッカに残された。アントニオ・ディアス、エステバン・ゴイス、ベルキオール・ディアスの三名に前年入会したメンデス・ピントが加わっていた。五名の孤兒もつれて来られた。その中の一人、ギリエルモ・ペレイラは後日、日本でイエズス会に入会した。

ザビエルは「哲学に精通している者」を日本教会のために求めていた。(9) ザビエルはヌーネスを優れた人物・学者として認め彼に日本赴任を命じた。「我々の管区長(ザビエル)の希望は私が日本に赴くことであった。彼は日本人は全く道理を求める国民であるから、私の学問がインドよりも日本で有用であろうと述べた。そこで彼は文書でそれを許可した」。(10)

ヌーネスは府内到着後直ちに人事を行なった。府内にはトルレスとビレラ、平戸にはガゴを送った。ヌーネスは義鎮に謁見を願ったが戦争のため「臼杵に引籠っていて」なかなか会えなかった。ヌーネスは印度副王の正使であった。彼は臼杵に義鎮を尋ね、副王の書簡と贈物を持参した。(11)

訪問の折、義鎮は杉材でできた家屋数軒を教会に寄贈した。「王は当国の最良の杉材を以て造りたる数軒の家と、毎年五十クルサドの収入を我等に与えたり。但し此事を取扱う者は之を我等に払渡さず……我等は又同国王の認可を得て広き好き地所を買いたり。此地所は王が前に我等に与えし甚だ好き他の地所に接したり。」(12) 「王が我等に与えた家の一軒を教会堂に

し、居住所と集会所を設け、購入した地所に置いた。教会建設にはキリシタンは我等を助けた。そこでの初ミサは諸聖人の日であり、出航寸前であったメルキオール師がたてた。<sup>(13)</sup>

「国王が当豊後国に於てパードレ・バルテザル・ガゴに与えし他の地所は之を二分し一は死者のために用い、他には王の許可を得て病院を設立せしが……病院は二つに区分し、一は当地に多数ある癩病患者の用にあて、又一は其他の病氣のために用う。<sup>(14)</sup>」治療の賜を有する良き人材を兄弟として受入れた。彼は治療法をよく心得ている。<sup>(15)</sup>「病院は一五五六年中に完成されていて、実際の治療は翌年五七年より行なわれた。最初は乳児院があり、そこに病人が訪れるようになって、本格的病院の運びとなったものであろう。心理療法などもあったが、宣教師は医学の基礎的知識は有していた。<sup>(16)</sup>

ヌーネスは精力的に豊後を歩いた。彼はフェルナンデスを伴にして府内近隣を巡回した。しかし、二月の間病氣の連続であり、結局ビレラのみを残して印度に帰った。<sup>(17)</sup>ヌーネスの訪問と帰国についてトルレスとその仲間は何りすっきりした感情を抱かなかつたようである。トルレスとヌーネスには意見のくい違いが多々あつたと思われる。

トルレスは適応を考えた先駆者であつた。ヌーネスは日本の会員は野菜と米を通常食べていることを確認した。<sup>(18)</sup>トルレスと同僚の数人は普通食として調理のまずい米と野菜料理以外をとることが許されるように訴えたがトルレスは、「悪例を示さないためにこの土地に於てはこうすることが肝要である」ときっぱり答えた。彼は単に「善良な老人」ではなかつた。<sup>(19)</sup>「極めて困難なことであるが、土地の住民に適応し得るためにパードレは充分な配慮を払うように」トルレスは要求した。<sup>(20)</sup>彼は「順応の先駆者である」と言われている。「トルレスが日本の風習に適應するに際して犯したあやまち」に不安を抱いている人達が居た。「それにしても、トルレスもまた素朴な形においてであつたが、異国の風習をとり入れる問題の先駆者であつた。<sup>(21)</sup>」トルリはトルレスは寂しげな感じ (melanconico) であり、自分に厳しい人で、他の人にも厳しくて、多くの宣教師は日本を去つたとヌーネスが述べたと伝えている。ヌーネスはインテリで理想にもえた宣教師でなかつたと思われる。トルレスは衣食住にも厳しく、日本人の生活に適應しようとした人であつた。

ヌーネスは次のように言われている。「彼はキリシタンに対する熱意極めて乏しく、キリシタンをつくることなど眼中になかった。彼曰く、このような論説では多大の瀆聖を生ずると思われが故にかかる態度をとるのだと。たとえそれが一部の授洗の場合には正しいにしても、多大の瀆聖を生ずることは不確実なことではないのであるから、洗礼を授ける方がよい。彼は日本へ行った時と同様に帰任すべき理由もなく日本から帰り、そして彼の地のキリシタンの名誉を大いに失墜させるような言辭を弄していた」<sup>23)</sup>。ヌーネスは大量の回宗と簡単な洗礼に関して懐疑的であったと思われる。日本を巡回するうちに、とくに豊後の人々の授洗について多々疑問に思うことがあったのではないか。質的に深めるという方針を考えていた。トルレスは實際の人間であり、今ある人材で、日本人の助けを借りて、それがたとえ不完全な器であるとしてもできるだけの宣教活動をつづけていくと考えていた。「宣教師達は洗礼志願期の見方、及びその家族に影響を与えた基本問題で対立していた。宣教師達はキリスト教の創設について不安を抱きながら活動していた」<sup>24)</sup>。

ヌーネスは貴重な品物を日本に持参したがトルレスは羨望と盗みの機会になると言い、それらを拒わって印度に送り返した。<sup>25)</sup>この辺りにもトルレスとヌーネスの見方の相異がある。「大身達の戦争と不和とを見、又此地の擾乱せるを見て」<sup>26)</sup>日本を去ったという。ヌーネスの理由ならぬ理由がそこに隠されている。

しかし、ヌーネスは短い滞在期間に実に大切な仕事をした。ザビエルが書いた教理書は使用されているうちに多くの欠点が目について来た。そのためガールゴは五十単語位を改正、キリスト教用語化した。説明を加えるか、又は外国語を採入れるかの二つの方法があった。多くの場合、説明を加えるのはむずかしいので、外国語を日本人に分り易いように読ませた。「パードレ」とか、「ナタル」といったふうにある。<sup>27)</sup>しかしこれがために多くの新しい信者は教会を去った。ガールゴと共に教会の方針が少しづつ決定されていた。この日本教会の方針は後に中国教会の方針と異り、モレホン・リッチなどの論争となった。<sup>28)</sup>漢字を組合せてキリスト教用語をつくることと、ヨーロッパ語を土着語で書直すということの意見の相異であった。

ザビエルの教理書を見直してガールゴは新しい用語を入れて、一冊の本にまとめた。ヌーネスは日本滞在四ヶ月の間に教理書

をポルトガル語からラテン語でまとめた。ガーゴはロレンソの助けを借りて、新用語を用いて邦訳した。一五五六年中に邦訳し、五七年には「二五ヶ条」という題名で出版された。一五七〇年、カプラル来日までビレラの教理書とあわせて日本での公式の教理書であった。<sup>29)</sup> ヌーネスが神学的に準備されていた人であり、ガーゴの経験とあわせてかなり質の高い書となったと思われる。

ヌーネスのもう一つの功績は、ヌーネス自身が選んで日本教会のために持参した図書であった。彼は聖書学の権威であり、学識ある司祭であった。ザビエルも聖書と注解書を持参した。彼はアンジロに自分の教理書の抄訳をさせた。<sup>30)</sup> これらはいずれも筆写本であった。ガーゴ達も幾冊かは書物を持参しているはずだが不明である。本格的な書物はヌーネス一行に待たねばならない。

ヌーネスはザビエルが考えた通りに日本の宣教を考え、書物を選んで多く持参した。日本より戻ったアルカソールは、日本では書物が必要であることを説いた。メンデス・ピントは経済的に援助することができた。実際彼は四千クルサドをこの旅行のために寄付した。<sup>31)</sup> この時持参した物品のリストが残っている。五種類に分れ、五番目が書籍のリストである。<sup>32)</sup>

### 聖書関係の書物

(1) 三冊の聖書、六冊の新約聖書、いずれもヴルガタ訳。<sup>33)</sup>

(2) 七冊の注釈つき詩篇。

(3) テイテルマンの「雅歌」、「伝道の書」の注釈。<sup>43)</sup> テイテルマン（一五〇二—三七）はベルギー人、カプチン会士。人文主義者。比喩的、信心主義的解釈をとり、エラスムスの合理主義、字義的解釈と対立した。

(4) ガーネ「聖パウロの書簡注釈」。<sup>35)</sup> ラテン語本を原本に持ち、ギリシャ原典に基いた注釈を行なっている。ガーネはフランス人、一五四九年死亡。パリ大学学部長を短期間勤めた。

- (5) 「聖書対照事典」<sup>(36)</sup>。当時ニューレンスベルグ（一四八五）、ブランド（一四九六）とケルンのウゴのと三冊あったが、日本の宣教師は実践的、倫理的色彩が強いウゴのものを選んだ。日本の宣教師の活動は倫理色が濃かった。聖書を題材にした歌や舞・演劇はこの本からとられたであろう。

### 教父学・神学関係の書物

- (1) クリゾストモ、チプリアーノ・アグステイノー・ベルナルドの著作集。いずれもキリスト教教父の代表的人物である。
- (2) 聖トマス・アクイナス作品。「神学大全」、「対異邦人論」、「小作品集」といずれもトマス哲学・神学の代表作である。イエズス会はトマスの作品を日本に紹介した最初の人達であり、彼等自身もトミスタであった。アリストテレス・トマス哲学の論法で仏僧と論争を行なった。実際彼等が学んだサラマンカ大学、アルカラ大学は十六世紀初頭・トミズム復興期の神学を教えていた。<sup>(38)</sup>

- (3) シルベストレ・マゾリーニ、「神学大全」<sup>(39)</sup>。当時五十版を重ねていたベストセラーの全集であるが、倫理的色彩が強かった。トミスタでもある。イタリア人、一五三二年死亡。

- (4) グリエルモ・ペラルド、「徳・悪徳論」<sup>(40)</sup>。

- (5) テイテルマン、「信仰の要約」<sup>(41)</sup>。

- (6) 「教会史」一冊と「神学要録」<sup>(42)</sup>。いずれも倫理色が強く、護教論的傾向を有している。

### 倫理学・法学関係の書物

- (1) ナペロ、「告白の手引」八冊。ナペロは十六世紀の代表的倫理学者。パリに学び、サラマンカ・コインブラ大学で教えた。良心の問題、告白の時のすゝめという実践的面を有している。宣教師必携の書とされた。

(2) 「小教令集」<sup>(43)</sup>。中世よりの教令の収録書。倫理問題は日本宣教中で重要であり、ヨーロッパの神学者にその解決を求めたこともあった。

### 哲学関係の書物

(1) 「アリストテレス著作集」。初期のイエズス会士は哲学素養、とくにアリストテレスの理解は深かった。正式に日本で哲学が教えられるのは一五八〇年代まで待たねばならない。

(2) 「プラトン著作集」。

(3) ティテルマン、「哲学書」<sup>(44)</sup>。アリストテレス哲学であり、自然神学の手引書。二部に分れており、第一部は物理（自然と物体の運動）、第二部は心理学（靈魂の概念、その性質、意志、五官）。哲学は形而上学、数学、物理、倫理、論理学の五種に分類されている。

### 典礼書

(1) ドランド、「聖儀式の解説」<sup>(45)</sup>。典礼解説書の代表的作品。キリスト教の起源にさか上ってその儀式の解説を行なっている。秘跡論に関連して倫理問題が扱われている。

(2) 「グレゴリオ聖歌集」<sup>(46)</sup>と「オルガン聖歌集」<sup>(47)</sup>。典礼を荘厳に行なうことを日本教会は始めから大切にしていた。子供達で合唱隊をつくり、儀式に参加させた。

### 靈性に関する書物

(1) ロドルフ、「キリストの生涯」。

- (2) ゲルソン、「コンテンプトゥス・ムンジ」二冊<sup>49</sup>。邦訳されて日本人信徒の心を深く捉えた。ロドルフもゲルソンもイグナチオが回心の時読んだ本である。
- (3) 「聖人略伝」。後に府内のコレジオで翻譯される「さんとすの御作業」とかかわりがあると見てよい。
- (4) 「マルロ著作集」<sup>50</sup>。マルロは文筆家で修徳神学者。ガビエルは会員にこの著作をすすめたと言われる。
- (5) 「ボルジャの手記」<sup>51</sup>。イエズス会二代目総長ボルジャの手記は印刷にまわされた。しかしそれは短いこともあって他の人の作品もそれに加えられた。
- (6) 「キリストの十字架」<sup>52</sup>二冊。聖ボナベンツォラの靈性に基いて書かれたと言われている。

### その他

- (1) ネブリハ、「ラテン語文典」<sup>53</sup>。ひじょうに明瞭であり、イベリア半島では同書はラテン語学生の教科書であった。ゴア、マカオに於ても然り。日本でも初期にはこれが用いられた。フェルナンデスはこの本の順序に従って日本語文法を編み、セミノリオもこの文法書を利用した。
- (2) 「自然草の本」。菓草の種類を扱っていた。豊後の医学校の教材に役立ったはずである。<sup>54</sup>
- (3) 「トロメオの地図」、当時の航海者必携の書。トロメオは二世紀の人であったが、近世にまで用いられた。再版を重ね、改良された。当時メルカート(一五二二〜九四)によって改訂されていた。一五五二年の地図には日本は存在していない。
- 百余冊の書物が一度にもたらされた。しかもよく選定された書物であり、日本教会の発展に大きく寄与した。これらの書物が府内の修道院に置かれ、それらによって宣教師達が力づけられていたことを思うと楽しい。日曜毎に説教したフェルナンデスやダシルバはこれらから知識を得たことであろう。<sup>55</sup>

秋になって政局は落ち着き、宣教の仕事が再開された。十一月には四終について説教があり、諸聖人の祝日から十二月十七日



までミサとオメリアがつづけられた。この間、靈魂の不滅についての教が説かれた。十二月に入り、山口の情勢が落ち着いたので、トルレスに帰ってもらいたいと山口より使者が来たが、彼は義鎮と相談し、そのすゝめに従い、少し事情を見ることとした。クリスマスは荘厳に祝われた。遠来の信者達は会堂に泊り込み、府内の信者の家にも分宿した。クリスマスの夜中聖歌が歌われ、説教があった。

注 (1) 福尾猛市郎、「大内義隆」、吉川弘文館、一八四頁。トルレス書翰、「日本通信・豊後篇」上、二三〇〜三二頁。

(2) 和辻哲郎、「鎖国」、筑摩書房、一九七二年、一五〇〜五一頁。パチエコ・ディエゴ、「長崎を開いた人」、中央出版社、昭和四四年、一三〜二〇頁。

(3) F・ベレス書翰、Doc. Ind. I p. 368.

(4) シュールハンマー。「山口の討論」、昭和三九年、新生社、九〇〜一〇〇、一〇九〜一一四頁。

(5) フロイス、「日本史」一卷、平凡社、二二二〜二六頁。

(6) ビレラ書翰、「日本通信」上、一九六頁。

(7) フロイス、「日本史」一卷、平凡社、一九六〜九七頁。久多羅木儀一郎、「大友宗麟伝雑考」、大分県地方史一三〜一六号。

(8) ピント書翰、「日本通信」上、一七六頁。ヌーネス書翰、同二三九〜四一頁。

(9) EX 97, 10.

(10) ヌーネス書翰、Doc. Ind. III 82.

(11) J. Schütte, *Introducio ad Historiam S. J. Roma*, p. 551, n. 18. ヌーネスはピントが東方によく知られているので彼を正使としたと述べられている。誇り高いヌーネスが本当にそうしたか。

(12) トルレス書翰、「日本通信」同二三一〜三二頁。

(13) トルレス書翰、一五五七年一月七日、西語、J. 4, 72. J. Schütte, *Introducio*, p. 551.

(14) トルレス書翰、「日本通信」同三三二頁。

- (15) トルレス書翰『Schütte, Introductio, p. 551.
- (16) 海老沢有道「セブンス会府内病院の設立及び當時」『キリシタン研究第一輯』四五～四七頁。Manuel Teixeira, Luis de Almeida S.J. Surgeon, Merchant and Missionary in Japan.
- (17) ヌーネス書翰「日本通信」同二三頁。Valignano, Historia——p. 302.
- (18) ヌーネス書翰「日本通信」同二三頁。
- (19) ヌーネス書翰、一五六〇年一月一日、Doc. Ind. IV pp. 510～511.
- (20) シュールンマー、「山口の討論」、九九頁。
- (21) ロベス・ガイ、「初期キリシタン時代における準備布教」、キリシタン文化研究会、一九頁。パチェヨ、同上八〇～八一頁。
- (22) D. Bartoli, Dell'istoria della Compagnia di Gesie, L'Asia, a parte, libro VII～VIII, 1825, pp. 206—7.
- (23) カルネイロ書翰、一五五九年一月二〇日、Doc. Ind. IV p. 417.
- (24) ロベス・ガイ、「十六世紀キリシタン史上の洗礼志願者」、キリシタン文化研究会、三二—三三頁。
- (25) Valignano, Historia—p. 304.
- (26) トルレス書翰「日本通信」同二八三頁。
- (27) J. Jennes, a History of the catholic Church in Japan, Tokyo 1973, pp. 26～27.
- (28) H. Cieslik, B Gago, MB 1954 may—june, p. 87. G. Schurhammer, Das Kirchliche Sprachproblem in der Japanischen Jesuiten mission des 16 u. 17 Ghs. J. Jennes. 「中国教理講授史」台北、二四—二七頁。
- (29) J. Jennes, Catholic Church… pp. 22—23 : 26—27.
- (30) フロイス、「日本史」一巻、平凡社、七十七頁。Doc. Ind. I p. 340 : EX I 392 : EX II 190, 201.
- (31) ヌーネス書翰、一五五四年五月、Doc. Ind. III 84.
- (32) Lopez Gay, La primera Biblioteca de los Jesuitas, MN 1959～60, pp. 142—171, Doc. Ind. III 197—205.

- (33) ヴルガタ訳とはカトリック教会でもっとも広く使用されたラテン語聖書である。
- (34) 「Francisci Titelmani Commentarii in Cantica Canticozum Salomonis」に「Commentarii in Ecclesiasten Salomonis」  
一五三六半出題。
- (35) 「Johannis Gagnaei, Brevissima et facilima in omnes Pauli epistolas scholia」(1547)。
- (36) 「Concordantiae Bibliorum et Canonum, Hüge de Colonia」(1486)。
- (37) シヤーンマンター「正口の註釋」。
- (38) Lopez, Gay, La primera— pp. 154 s. q
- (39) 「Summa Summarum, Quae Syluestrina dicitur」
- (40) 「Summa Virtutum et vitiorum」
- (41) Titelman, 「Summa mysteriorum Christianae fidei ex auctoritate Scriptorum H et V—」(Amberse 1532)
- (42) 「Breve totius theologiae」
- (43) 「Os de cretaes peguenos」
- (44) 「Compendium naturalis philosophiae, libri XII de consideratione rerum naturalium earumque ad suum Creatorem  
reductione」(1530)。
- (45) Guillermo Durando, Rationale divinarum officiorum.
- (46) グレゴリオ聖歌は「Canto chao」と呼ばれ、他を「Canto d'organo」としている。これは多分モテット(合唱曲)のことであろう。
- (47) チースリック、「キリシタンと葬礼」。キリシタン研究第五輯、三二一—五八頁。サンチェス書翰、「日本通信」同三七—七九頁。
- (48) Ludoefo de Saxonia, Vita christi.
- (49) リストには「Contemptus」に「Gerjon」とある。同一の本でもなく。現代「キリストに倣いて」と訳されている。当時ゲルマンの著作と思われていた。

- 50 「Marci Maruli opus de religiose viuendi institutione per exempla. ex VetN. testamento collecta 1531. Coloniae」
- 51 「Obra del Cristiano. compuesto por Francisco de Boria, Duque de Gandia 1550」
- 52 「Cruz de sant Buenaventura Uamado Viae Syon Iugent. con otra dicha Praeparatio mortis. compuesto por un frayle de la orden de los menores. 1543」
- 53 Nebrija. Tres artes de Antonis.
- 54 シーリング、「日本に於る耶穌会の学校の制度」、東洋堂、一〇一―一二頁。
- 55 ヌーネス書翰、「日本通信」同二四九頁。

〔会告〕

- 大分県地方史料叢書 四 (A 5 頁版)
- 『元禄・天保豊後国豊前国郷帳』
- 大分県地方史料叢書 五 (A 5 頁版)
- 『佐伯藩温故知新録・古御書写』
- 白杵藩旧貫史(一) (二六六頁版)
- 『豊後国旧県管地沿革記・附録』
- 大分県地方史料叢書 六 (A 5 頁版)
- 『豊後国各郡沿革記』 (一八八頁版)

※ ご希望の方は事務局へ、会員一八〇〇円(共) 会員外二五〇〇円